

## 将来への提言

実行委員長 青柳 琢

### はじめに

第23回日本学生オリエンテーリング選手権大会も全日程が終了し、この報告書をもって実行委員会の仕事も終わりとなります。最後に、日本学生オリエンテーリング選手権大会実施規則第12条に従い、本報告書に将来の提言を以下に述べたいと思います。とは言っても、インカレ開催まで、及び開催期間中に起こった競技に関する出来事の経緯や報告とその問題提起等の重要な事柄は、大会コントローラー報告において記述してあるので、今後インカレをどうするか、どう変えていくかを考える題材としては、そちらも参照していただきたいと思います。ここでは、「提言」と言うには少々ふさわしくないかもしれませんが、自分の準備段階からの運営経験を基に意見を感想を交えて書かせていただきます。

### 少人数運営の取り組み

ここ数年、参加者減少に伴う学連への収入減や関東地区以外でのインカレ開催で頭を悩ませる運営者不足の対応として、運営人数を減らし、スリム化された運営体制でのインカレ運営の試みがなされていますが、2001年度は例年より一層の少人数運営を推し進めました一番の要因は、電子パンチングシステムを選手権クラスと一般学生とを同じくして、計時システムを一元化することにより、計算センターとゴールパートの要員を大幅に削減したこと：また、演出パートの要員も例年以上に削減にところであります。計算システムは、人数分のEカードの確保や管理等の不慣れから、かなりの負担増になってしまいましたが、少人数運営をする上では電子パンチングシステムは、欠かせないと言えます。早い段階からシステムの構築に取り組み、経験を積んだ熟練者が集まれば、今年よりもっと楽に運営できたと思われます。また、演出パート員の削減もゴールと演出ブースをパソコン同士をLANで繋いでパソコンでデータ整理を行った上で、タイムをプリンターで打ち出してしまう方式で人数を削減しました。もちろん、ここでも人員削減には、過去に演出経験に実績のある熟練者に負うところが大きかったです。結局のところ、少人数運営の実現には、いかに熟練者を集めるか、もしくは開催までに実行委員内に熟練者を育てるかにあると言えます。インカレの運営費削減は、学生の参加人数が減っている今、避けてられません。そして、経費削減には運営人数の削減が一番簡単なのですが、その一方で、ひとつだけ懸念することは、少人数化をこれ以上推し進めることが、果たして将来インカレ運営者を募る上で為になるかとも思います。人数を削減すれば、委員一人一人の負担はどうしても増大します。それに委員の運営能力や経験がある程度なければ難しくなります。そのため、熟練者を中心に実行委員が組織されるようになれば委員になるための敷居が高くなります。新しい人材の発掘という面では、より困難になるでしょう。かなり積極的な人員確保に奔走しなければ、いつまでも限られた人がインカレ運営を負うところになってしまうことで

しょう。少人数化は、将来へのインカレ運営者の人員確保や育成をリンクさせて行わなければならないところに、その課題があると言えるでしょう。

### 併設クラスの扱いについて

選手権クラスに対して、それ以外の学生一般の部（以後、学生一般）クラスは、選手権クラスと違って、実施規則がないこともあり、その年の実行委員会の裁量に任されています。故に、学生一般クラスの規模や扱いは、選手権クラスをしっかりと準備できる体制があり、その上で実行委員会に、あと余力がどれくらい残っているかに大いに影響される部分だと思われまます。今実行委員会では、インカレの参加者の大部分は学生一般クラスの参加者であり、たとえ選手権クラスがメインであっても、学生一般クラスの参加者がいなければ、インカレに使う地図すら作成する費用すらまかなえない現状を踏まえて、かなり併設クラスには力を入れました。コースのバリエーションを増やし、参加者の選択肢を増やすことで少しでも参加者を増やす試みをしました。宣伝不足もあり、クラスの細分化による効果はどれ程あったのかは定かではありませんが、参加者を増やすための参加することに興味を持ちそうな、そういった試みは今後も必要かと思えます。しかし、毎年の学連加盟員数の減少の前には如何ともし難いものがあったのも事実です。学生の参加者減少に対しては、共催の大会規模を大きくすることで、一般参加者を募り、学生参加者減による収入の減少を少しでも補うことにも努めました。インカレは選手権大会である一方で、現在のインカレを維持していくには、学生一般クラスへの参加者も大切に、少しでも学連加盟人数に対するインカレ参加者比も高めていく努力を、学生と共に、実行委員会は取り組まないといけないと考えます。また、学連加盟員数そのものの減少に対しては、もっと共催大会にも力を入れ、インカレと共催大会を一つの大会として、トータルでの参加者数を維持するという事も視野に入れてインカレ開催を模索していく時期ではないかと思えます。

それは、別の大会と共催することで、運営者も卒業生に限らず地域クラブ員や地元の方々との協力で行う選択肢も得られます。もはや学生一般や共催大会による一般オリエンティアの参加なしにインカレの維持は無理な時期にあります。今後もインカレ開催を続けるならば、学生併設と共催大会の扱いは今後も充実させる必要があると考えます。

### 主催者としての学生

インカレは学生が主役であり、どのように学生を率先してインカレへ関わりを持たせるかは昔からの一つのテーマでした。しかし、公平性の関係上、学生が運営に関われるのは、結局のところ開会式や会場の掃除等くらいしかないとも言えます。今大会は「トト郎」という企画を通じて、学生有志が主体となり自分達がよりインカレを楽しむことを模索し、それを実行委員会としても公平な立場を犯さぬ範囲でバックアップしました。学生がインカレに関わるということは、むしろ運営面の実務的なことに関わることよりも、こういった自分達（学生）が、よりインカレを楽しむことを企画し、実行委員会と一緒に大会を盛

り上げることにあると感じました。また、どんな大会にするのかを実行委員会との対話を通じて実現していくことが、インカレへの一番の関わりを持つこととも言えるでしょう。ですから、その意味でも今後も学生からのインカレを面白くする企画に対しては、実施規則を逸脱しない範囲で実行委員会は寛容であってほしいと思いますし、学生からも実行委員会へ提案や要望を現して行ってほしいと思います。

## その他

今大会は上記に上げた以外にも、多くの試みを行ったつもりです。

- ・ 参加費と宿泊費の振込み先・振込み期限の分割
- ・ 併設大会を充実させるためのアンケート
- ・ 選手権クラスと同コース（チャレンジコース）設置
- ・ トレイル0の誘致
- ・ シダックスによる昼食（お弁当・豚汁）の供給
- ・ 地域クラブのクラブ紹介ブースの設置などなど

それが成功か失敗かは別にして、今回のインカレが今後のインカレへのあり方を考える上での参考になる部分もと思われます。地域や会場の制約等により、今年度の大会で出来たこと必ずしも出来るとは限らないし、時代と共に考え方は変化することもあります。また、全てを例年のインカレにあてはめて、運営形式をマニュアル化することは難しいでしょう。また各地域によるインカレ開催では、その地域の独自性も必要でしょう。しかし、学生より好評だったことに関しては、出来るだけ引き継がれてほしいと思います。それが実行委員内部の運営反省&報告書資料だったり、学生時代に自分が味わったインカレの楽しさなり、感動なりを大切に、卒業後に実行委員となり運営者として後輩に伝えていく、その方法は、人それぞれで構わないとは思いますが。

## さいごに

インカレをどうしてほしいかの要望は、インカレのオフィシャル HP 上でのアンケートを取れば意外と集まるものでした。今回も多くの意見をいただき、実現したことの多くはアンケートの要望にあったことでした。アンケートに意見を出された方も、それが実現されていたことに気付いた時には、きっと自分の意見でインカレを変えられる。ということを少しは実感出来たでしょう。

今後も、学生にとってインカレは実行委員会に開催してもらうもの、実行委員会がインカレは学生にやってあげるものというイメージを払拭して、学生・実行委員会が一緒に創り上げていくものというイメージを、より一層浸透させ、またそのための努力を実行して行ってほしいと思います。